

駒ヶ根市中沢地区の魅力 再認識する住民と学生たち

9月10日(木)から13日(日)まで3泊4日の日程で行われた駒ヶ根市「中沢地区魅力発見調査」。過疎化が進む地域に外部から学生らを招き「若者のストリートな視点を通じて地区の魅力再認識し、活性化につなげる」ことを目的とした県下初のプロジェクトは、参加者の心に何を残し、どんな成果をあげたのか。今回は学生たちの声を中心に伝えよう。



メンバーは24人。議論は深夜までとどまることを知らず続けられる

全日程4日間のうち、フィールドワークにあてられたのは9月11日(金)、12日(日)の2日間。江戸川大社会学部鈴木輝隆教授とゼミ生、LD(ローカルデザイン)研究会メンバーを中心とした計24名は、「人材・特技・物語(2班)」「景観・スケッチ」「かたち・デザイン」「食べ物、伝統・創造」「商品づくり・産業」「映像」の6つのカテゴリに分かれて、区長、農業従事者、伝統文化や食文化を守る人びと、他地域からの移住者、芸術家など、さまざまな住民への聞き取り調査を実施した。朝から夕方まで地域を散策し、夜にはその結果を元に議論とまとめ作業を行うというハードな日程の中でも、学生らの熱意は冷めることなく、深夜まで議論が続けられた。

学生たちが感じた 中沢地区の魅力とは

「今回のフィールドワークを通じて、中沢の方々の生きる意欲を感じ、驚くことばかりでした。人が行うこと、守っているもの、性格や生き方がさまざまなことなどすべてに興味がある。今まで、地域のことを考えよう、伝統や景観を残そうと勉強してきましたが、それは何のためなのだろうと、学んできたことを考え直すきっかけにもなりました」と語るのは「食べ物、伝統・創造」班の駄賃場桃子さん(4年生)。重労働をこなしつつも自らの職に生き甲斐を感じ、笑顔で暮らす農家の家族、交通の便が悪い不便な地に暮らしながらも「自然に囲まれ、健康で自由に時間を使える今の生活が好き。今が人生最高の時だ!」と豪快に言いきる男性、農村生活マイスターとして地域に貢献する女性たちなど、地区に暮らす人びとの前向きな「強さ」と「信念」は、若い学生らの心に鮮烈な印象を与えたようだ。

また、「歩いていて、たくさん種類の花を見つけるたびに楽しい気持ちになれました」(2年生・岡崎翔平さん)「田舎である、というイメージが無かったのですが、実際に来てみたら自然豊かでガーデニングが盛んなきれいな町でした」(2年生・石川吉人さん)と、中沢地区の山村風景に感じ入る声や、「一番の魅力だと思ったのは、人びとの温かさです。朝・昼・晩と食事を用意してくださったり、中沢地区のいいところやこうしてほしいということや気軽に話してくれたので素直に聞きたいことが聞けました」(2年生・春日井充さん)と人びとの「優しさ」に感動し、「都会には絶対ありえないものが、田舎にはたくさんあるということを痛感しました」(2年生・田代竜平さん)との声も。

4日間で見えてきた 住民の暮らしと学生の心

「見れば「何もなし」里山の暮らしも、視点を変えれば多くの魅力に溢れており、地域外の人びとをも大らかに受け入れる住民の姿勢や安らげる環境が、訪れた若者の心にあたたかい「何か」を残す。人と人との触れ合いから生まれたこうした感情も、今回のプロジェクトの大きな成果といえるだろう。

学生たちの「想い」は、最終日である9月13日(日)、「中間報告会」にて発表された。それを受けて住民らは何を感じ、その後、中沢地区はどう動き始めたのか。次号、最終回で報告したいと思う。

- 1.とれたての野菜を使った料理。この時間が一番楽しい
- 2.地元のみなさんと意見交換をしながらの食事は和やかな時間
- 3.4.5.昼食、夕食は各地域の方々が交代で料理を。会場が公民館だけに、大鍋、大鉄板はこと欠かないが、大勢の料理を作るのは迫力がある
- 6.駒ヶ根市大曾倉地域。大曾倉市有林活用計画策定委員会を立ち上げるなど、地域全体が山林を占める場所
- 7.地元の方に熱心に話を聞く学生と鈴木先生。気さくな人柄は地元住民の心を開く

